

9月7日(土) 研究発表1 第8室(1130)

方略の学習過程に見られる差異：ポートフォリオ分析より  
 Difference in Strategy Learning Process: A Portfolio Analysis

池田 真生子(摂南大学非常勤講師)  
 竹内 理(関西大学)

### 1. 研究の目的

方略の使用が言語学習において重要な要因の1つと考えられるようになり、方略訓練についての研究も数多く報告されるようになった(例えば、Cohen, 1998; Oxford, 1996; Takeuchi & Wakamoto, 2001)。しかし、これらの研究では、方略訓練の効果が量的に分析されており、新しく教授された方略を、学習者がどのように習得してゆくかのプロセスに関しては十分に明らかにされていない。そこで本研究では、読解方略の訓練に焦点を絞り、訓練の方法およびデータ収集の手段として質的アプローチであるポートフォリオを使用して、学習者の英語能力により、新しい方略の学習過程にどのような差異が見られるのかを検討した。

### 2. 方法

被験者は、外国語としての英語を学習する日本人大学生30名であった。そのうち、クローズテストおよび授業の平常点により、上・下位群として各5名を抽出した。被験者の方略使用および学習状況についてのデータは、調査紙(読解タスクを付随)とポートフォリオにより収集された。具体的な手順では、まず、読解学習に効果的と考えられる方略の訓練を毎授業時(合計8回)に約20分間実施した。この後、授業時間外の課題として、授業中に学習した方略を再度利用し、その使用状況、感想について詳しく記述させ、これを提出させた(ポートフォリオ)。授業内における訓練の内容は、方略の使用方法を明示的に説明し演習を行う(2回目以降は、前回学習した方略の復習も実施)というものであった。この訓練の前後に、被験者の方略使用頻度に関するデータが調査紙により収集された。

### 3. 結果

主な結果として、次の2点が明らかとなった。第1に、学習者の英語能力により、新たに学習した方略の有効性を検証する方法が異なることがわかった。つまり、下位群が、方略を使用した読解作業のみにより、その有効性を検討していたのに対して、上位群は、方略を使用した場合と使用しなかった場合の2通りの読解作業を行い、その比較により方略の有効性を検証していた。

第2に、学習者の英語能力により、方略の有効性に対する判断基準が異なることもわかった。具体的には、新たに学習した方略をうまく使用できなかった場合、下位群は、一度きりの使用で即座に、自分に不向きな方略と判断してしまっていたが、上位群は、文章との相性や、方略の使用法の良し悪しなども考慮し、方略の有効性を多角的に検討していた。

発表では、分析結果のより詳細を報告するとともに、ポートフォリオの質的分析より見出された方略学習過程に関する仮説を、今後どのように量的に検証してゆくのかについても言及する。さらに、ポートフォリオを使用した方略訓練の具体的方法や、被験者が実際に作成したポートフォリオも紹介する予定である。

#### 参考文献

Cohen, A.D. (1998) *Strategies in Learning and Using a Second Language*. London: Longman.

Oxford, R. (ed.) (1996) *Language Learning Strategies Around the World: Cross-cultural Perspectives*. Honolulu: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawai'i at Manoa.

Takeuchi, O. and N. Wakamoto (2001) 'Language Learning Strategies Used by Japanese College Learners of English: A Synthesis of Four Empirical Studies.' *Language Education and Technology* 38: 21-44.